テレビのロケで、女の子がお風呂に入れられたシーンが撮影、おっぱいやまんこ・おしりが全国に放映されてしまった話

人気番組『世界の裏側でサバイバル！』

～ジャングル探検スペシャル～

テレビ画面に明るいテーマソングが流れ、スタジオのMCが元気よく叫ぶ。

「今日は超スペシャルロケ！ 若手人気俳優の桐谷健介さんと、天才中学

生アスリート・松山七菜香ちゃん、そしてドラマでブレイク中の子役・原口祐介くんが、ジャングルを探検します！」

画面が切り替わり、緑豊かなジャングルの入り口に3人が立っている。

桐谷健介は23歳のイケメン若手俳優で、朝ドラや恋愛ドラマで人気急上昇中。

松山七菜香は14歳の天才陸上少女。100mと走り幅跳びで全国大会を制覇し、将来を嘱望される美女アスリート。引き締まった長い脚と、鍛え抜かれたプロポーションが話題だ。

原口祐介は13歳の、子役として人気の可愛らしい少年。

「健介さん、七菜香ちゃん、今日はよろしくお願いします！」

祐介が明るく声をかけると、健介が笑顔で肩を叩く。

七菜香も「がんばろうね！」と元気よく拳を突き出した。

現地のガイドさんとカメラマン、スタッフ総勢10名ほどが同行し、ロケがスタートした。

朝から3人は大はしゃぎだった。

まず最初に目に入ったのは、木の上にぶら下がる大きなバナナの房。

「わあ！ こんなにたくさん！ 採ってみようよ！」

七菜香が興奮して指差すと、祐介が「僕も！」と駆け寄る。

健介が背伸びをしてバナナをもぎ取り、3人で分け合って皮を剥いて食べた。

「甘い！　日本で食べるのより全然ジューシー！」

祐介が口いっぱいに頬張りながら笑う。七菜香も「ほんとだー！」と目を細める。

次に現れたのは、色鮮やかな蝶の大群と、珍しい巨大なカブトムシ。

祐介が怖がりながらも「すげー、触ってみていい？」と手を伸ばすと、ガイドさんが毒持ってるかもしれないからダメですと促す。

七菜香は「かわいいー！　写真撮ろう！」とスマホを構え、健介が2人を優しく見守る。

昼過ぎには村の人々と交流した。

現地の子供たちと一緒に踊ったり、伝統的な楽器を叩いたり。

祐介も一緒に踊り、七菜香はすぐに打ち解けて大笑い。

健介は「みんな仲良しだね」と微笑みながら、村の女性から手作りのお守りをもらった。

午後には珍しい植物や動物を観察することに。

巨大な葉っぱで雨をしのいだり、木の根元に生えたキノコをガイドさんに教えてもらったり。

雨が降り出したので、大きなドラム缶を2つ用意し、雨水をため始めた。

「これ、ろ過すれば飲めるんだって！」

健介がフィルターを使って丁寧に水を浄化し、3人で飲んでみる。

「うん、普通の水と変わらない！」

祐介が目を丸くして言うと、七菜香が「本当だ！」と頷く。

日が沈み、ジャングルは一気に暗く冷え込んだ。

焚き火を囲んで竹でご飯を炊き、ヤシの実をお皿代わりに使い、みんなで「いただきます！」と手を合わせる。

「熱いけどおいしい！ ジャングル飯、おいしいね！」

祐介が頬を膨らませて食べる姿に、七菜香と健介が笑う。

食事が終わると、気温がさらに下がった。

「寒いね……体が冷えてきた」

七菜香が少し震えながら言う。

ガイドさんが提案した。

「雨水をたくさん貯めたドラム缶があるから、あれを温めて風呂にしましょう。」

健介の顔がぱっと明るくなる。

「ドラム缶風呂！？ いいね！」

スタッフが素早く火を起こし、ドラム缶のお湯を温め始めた。

高さ約90cm、直径60cmほどの鉄製ドラム缶。七菜香にとってはかなり高い。

お湯が適温になると、スタッフが「できたよ！」と声を上げる。

健介が明るく言った。

「七菜香ちゃん、お風呂入っていいよ。俺と祐介は男だから1日くらい風呂入らなくても全然我慢できるし。七菜香ちゃんは女の子だから綺麗好きだと思うから、僕らのことは気にしないで入っていいよ」

祐介も元気よく続けた。

「そうだよ！ 七菜香ちゃん優先！ 僕たち男は大丈夫だから、七菜香ちゃんが入って！」

スタッフの男性陣も口々に声をかけ始めた。

「そうだね、女の子は清潔にしておかないとだし、綺麗に洗って画面映りもちょっとは気にしてあげなきゃだもんな。」

「それに天才美少女アスリートの鍛えられた肉体は、ある意味画的にも絶対映えるし、むしろ良い撮れ高になりそう」

七菜香は顔を赤らめながら少し後ずさりし、

「え……でも……みんなの前で……」と渋々言いよどむが、周囲の皆が笑顔で「大丈夫だよ」と繰り返し促すので、仕方なく小さく頷いた。

「じゃあ……お言葉に甘えちゃいます……」と恥ずかしそうに言い、草陰に隠れるように移動した。

七菜香は草陰に隠れて服をすべて脱ぎ、全裸になった。

その後、白いバスタオルを体にしっかり巻いて、男性たちが待つ焚き火のそ

ばに戻ってきた。タオルの下はすでに何も着けていない完全な裸の状態だった。

健介がにこやかに近づいた。

「七菜香ちゃん、準備できた？ じゃあお風呂入れてあげる！ ほら、タオル巻いてたらタオルも濡れちゃうよ？ タオル取って！」

七菜香は恥ずかしそうにモジモジしながら頷く。

「う、うん……」

「俺が持ち上げて入れてあげるよ！ タオルは取って！ お湯が冷めないうちに早く入ろう」

健介の言葉に、七菜香は慌てて両手でタオルを強く押さえた。

「え、えっと……取らなくていいよね？みんな見てるし……」

「大丈夫だって。ほら、隠さないで！七菜香ちゃんはアスリートなんだから鍛えた体はある意味芸術みたいなものだから、恥ずかしくないって」

健介が優しく、しかしはっきりと言いながら、七菜香の腰に巻かれたタオルに手をかけようとする。

七菜香は必死にタオルを押さえ、顔を真っ赤にして体をくねらせる。

「い、いろいろ見えちゃうよ……恥ずかしい……」

祐介はドラム缶のすぐそばに立って、興味津々で七菜香を見つめている。

目が輝き、口元に小さな笑みが浮かんでいる。

健介が後ろから七菜香の体を抱きかかえるようにして持ち上げようとするが、まずはタオルを完全に取ることにした。

「祐介、タオル取ってくれる？」

健介が笑いながら言うと、祐介が素早く手を伸ばし、七菜香の身体に巻き付いていた白いバスタオルをぱっと引き抜いた。

その瞬間――

七菜香のおっぱいや陰毛、おしりが完全に丸出しになった。